

兵庫の近代和風建築と産業

はじめに 奈良文化財研究所では、2011年度より兵庫県から、県内に所在する近代和風建築の調査事業を受託している。第1次調査により抽出された約7,500件から約120件を選抜し、3カ年計画で詳細な調査を実施するものである。兵庫県は、明治以降、横浜とならぶ国際港として著しい近代化を遂げた神戸を有し、西洋文明が開化した。神戸市北野町山本通伝統的建造物群保存地区に代表される西洋建築群はその顕著な例である。しかし近代の兵庫は、西洋化のみで語ることができるものではない。本稿では、調査によりあきらかになってきた兵庫の近代和風建築の特質について、特に産業の展開の視点から、近代化遺産との対比を通して概観したい。

鋳 業 朝来市に位置する生野鋳山は、江戸時代以来、日本を代表する銀山として繁栄をみせていた。明治元年(1868)には日本初の官営鋳山となり、明治29年には三菱合資会社に払い下げられ、日本の近代鋳業を牽引した。煉瓦造建物群、坑道、またそれらに関連するダムや水路など、近代技術が結集された遺構が現存する(『兵庫県の近代化遺産』pp.69-72)。いっぽう、平安時代後期に採掘がはじめていた多田銀銅山において、銅鋳製錬をおこなっていた平安家のように小規模ながらも製錬を近代化することで継続した事例もある。製錬所はすでに失われ、炉跡などが発掘調査であきらかになるのみであるが、隣接して建つ住宅が現存し、川西市郷土館(旧平安家住宅)として活用が図られている。住宅の敷地は南を正面とし、西半を屋敷、東半を作業空間に区分している。屋敷部の



図47 川西市郷土館(旧平安家住宅) 玄関棟

中央に位置する主屋はこの地域の農家建築の伝統を継承する2列3室の六間取り平面をもちながら、意匠は数寄屋風の軽やかな意匠をもち、その構造上の負荷を桁行方向のトラスによって担保している。屋敷部の南に位置し、町家における表屋造の形式をもつ玄関棟は、土間・事務室・応接室よりなる桁行5間、梁行2間の小規模な建築であるが、四周に廻らす下屋を大振りな銅製の持送りで支持する。生業が意匠に表出しているといえよう。伝統的意匠を近代的な技術により展開している好例である。

造酒業 兵庫県は江戸時代より醸造業の盛んな地域であった。その中でも灘地域の造酒業は、室町時代には始まっていたとされ、江戸時代には樽廻船を利用した江戸向けの出荷が活況を呈した。明治時代に入ると、その傾向に拍車がかかり、地方の酒造量が減衰するなかで、上昇の傾向をみせている。昭和に入ると、次第に製造の機械化が進む。昭和5年(1930)に建てられた辰馬本家酒造白鹿館(西宮市、2010年解体)は、その最たるもので、冷凍蔵と瓶詰工場からなる(『兵庫県の近代化遺産』p.78)。冷凍蔵は冷房機能と製氷機能を備え、それまで冬季が適するとされていた酒造を年中可能なものとした。瓶詰工場は清酒の容器が樽から瓶へと変わるなか建設された鉄骨鉄筋コンクリート造の連続アーチにより、約24m×64mの大空間を無柱で支えるものである。西洋から取り入れた新技術そのものといってよい。同じく辰馬本家酒造に大正5年(1916)に建てられた宜春苑(旧本社事務所、西宮市)には西洋技術・和風要素をみることができる。1階建、桁行10間、梁行4間半、入母屋造、平入、棧瓦葺で、四周に持送り付き腕木で出桁を支持する庇を廻らし、農家系の伝統的意匠を継承する。旧営業所は一室の



図48 宜春苑(辰馬本家酒造旧本社事務所)旧営業所

大空間で、折上格天井を張り、和風意匠を基調とする。また桁で持ち送られた高窓によって、採光・通風をおこなう。この内部空間はキングポストトラスによる小屋組によって構造面を担保している。事務所という建築類型自体が西洋の産業形態を導入したものである。その意匠は和風を基調としながらも、その空間は西洋の技術で担保されている。活況を呈する灘の酒造業者は、文化事業も展開した。大正9年建設の白鶴美術館（神戸市）は白鶴酒造七代の嘉納治兵衛によるもので、自らの収集古美術を保護、公開するために建設した。その構造は鉄筋コンクリート造であるが、施主の意志により、中国および日本の工芸品などの所蔵品とあうように、和風の意匠でまとめられた。配置を寝殿造風、軸部を寺院風、屋根を権現造風、鎌倉時代風の蓑股、卍崩し文様の細部など、時代や建築類型を横断した外観を形成している。同時代の鉄筋コンクリート造による帝冠様式の建築とは一線を画する和風に対する理解を読み取ることができる。

実業家による邸宅 釀業・造酒業といった特定の産業にとどまらず、種々の産業を手がける財閥が形成されるのも近代の特徴である。莫大な資産を得た彼らによって阪神間には、数々の洋館が建てられた。それと同時に彼らは、そのネットワークのなかで、独自の和風建築感を形成してゆく。大正5年（1916）に建てられた宝塚市長尾山に位置する井植山荘は藤田財閥を築いた藤田伝三郎の三男・彦三郎による数奇屋建築群で、その典型である。戦後、三洋電機の創業者・井植歳男が取得した。敷地は最明寺川の溪谷を取り込んだ10万坪におよぶ。建物は棟梁・日吉忠次郎によるもので最明寺滝を望む西岸に位置する。主人の間棟、管理棟、玄関棟、囲炉裏の間棟、客

間棟、浴室棟を、各々傾斜に並行になるよう配置し、周囲には梅園梅叟による庭園を営む。客間棟はもともと格式の高い座敷として、書院造の要素を加味し、角柱を用いるが、そのほかは面皮柱を主として丸太材を多用するなど、銘木の利用が随所にみられる。これらに用いられた木工技術はほぼ頂点に達したものとみてよい。藤田家では、大正7年に長男・平太郎の別邸（現・箱根小涌園貴賓館）、大正3年に二男・徳次郎の大阪綱島別邸（太閤園淀川邸）を、今井平七など数名の棟梁で建てている。綱島別邸には井植山荘とよく似た手法もみられ、同じ大工が参加した可能性も残る。いずれにせよ施主の好みも、棟梁を通して色濃くあらわれているのは確かである。

おわりに 以上のように、近世からつづく産業を基盤としながら、西洋の技術を近代化を遂げた各産業に関連する建築を、洋風、和風という視点でみると、建築類型、構造、意匠に幾重もの入れ子の図式を見いだせる。この複雑さこそが近代の実態である。また産業を担い成功を手にした実業家たちによる数寄屋建築には、木造建築の技術的な頂点をみることができる。本稿でとりあげた産業とその建築は、近代兵庫の一部でしかない。ほかにも、伝統的産業が展開した養蚕、醤油製造、近代に興った造船業、マッチ製造などが、近代兵庫を代表する産業としてあげることができる。また産業にまつわる建築のみならず、公共建築、社寺建築、各種住宅建築などを通して、近代兵庫の多様な側面を和風建築を通して読み解きたい。

（鈴木智大）

参考文献

兵庫県『兵庫県百年史』1967。

兵庫県教育委員会『兵庫県の近代化遺産』2006。



図49 白鶴美術館本館



図50 井植山荘浴室棟前廊下